

2021年度 一般社団法人日本社会福祉学会 学会賞受賞に寄せて

学会賞審査委員会による審査の結果、2021年度の学会賞が決定し、学術賞(単著部門)として西崎緑会員ならびに平野隆之会員が、奨励賞(単著部門)として田中智子会員が選ばれました。

授賞式は、第69回秋季大会一日目の2021年9月11日に、開会式に引き続いてオンラインにて行われました。

受賞された方々からの喜びの声をお届けします。



◆ 学術賞(単著部門) 西崎 緑(熊本学園大学)

受賞作:『ソーシャルワークはマイノリティをどう捉えてきたのか

——制度的人種差別とアメリカ社会福祉史』

(勁草書房、2020年8月25日刊)



この度は、拙著『ソーシャルワークはマイノリティをどう捉えてきたのか——制度的人種差別とアメリカ社会福祉史』への学会賞(学術賞)授与という栄誉にあずかり、大変感謝しております。本書は、長年あれこれ迷いながら進めてきた研究の成果ですが、多くの先輩や友人、そしてアメリカの優秀なアーキヴィストの助けがなければなし得なかった研究であることを申し添えます。改めて彼等一人一人に感謝したいと思います。

さてここで、受賞作の意図を改めて申し上げますと、これはアメリカ社会の中で周縁化されたマイノリティ(特にアフリカ系アメリカ人)とソーシャルワークとの関係を、時系列に沿って辿ることにより、ソーシャルワークの別の面を浮き彫りにする試みでした。社会正義の実現というソーシャルワークの思想・哲学は、専門職団体や専門職の持つWASP文化が背景となって、人種を越えて適用できなかったというのがその姿です。

このように社会が作り出す様々な人為的分類は、人種に限らず、民族、性別、性的指向、社会階層、障害の有無などにも及び、特定のグループに対するステレオタイプ化が、ソーシャルワーカーの先入観や偏見に影響を及ぼします。時には、原因と結果をすり替えて対処してしまうこともあると言えます。そのことを、アメリカ社会福祉史の苦い経験から私たちは学ぶ必要があるのではないのでしょうか。

本書の出版後ではありますが、#BLM運動に触発され、全米ソーシャルワーカー協会は、ついに2021年6月、黒人、アメリカ先住民、日系人などのマイノリティの置かれた状況に対して、十分な支援

と闘いを行ってこなかったことを認め、公式に謝罪しました。遅すぎる謝罪ですが、その意義は大きいと言えます。

翻って、日本におけるソーシャルワーカーの実践についてはどうでしょうか。私たちは、ある人々に対する偏見から本当に解放されているのでしょうか。21世紀に生き、実践するソーシャルワーカーには、自らの差別意識を自覚した上で、それを克服しながら社会の不条理と闘うソーシャルワーカーであってほしいと願っています。

最後に審査委員会からの講評において指摘されている課題、①「ソーシャルワーク界」の意味するものの明確化、②1960年代以後のアメリカ社会福祉史、③ソーシャルワークの研究・教育における人種差別克服への取り組み、④キリスト教の動向との関連について、今後の研究課題として鋭意取り組んでいきたいと思えます。またそれらも含め、本書で十分に論じきれなかったところや、さらに深めていくべき部分も改めて考えさせられました。研究の次の段階を考える機会を与えてくださったことにも感謝申し上げます。

◆ 学術賞(単著部門) 平野 隆之(日本福祉大学)

受賞作:『地域福祉マネジメント ——地域福祉と包括的支援体制』

(有斐閣、2020年3月25日刊)



日本社会福祉学会の学術賞は、言うまでもないことですが、出版した書籍『地域福祉マネジメント:地域福祉と包括的支援体制』に対して授与されたものです。しかし、私自身の勝手な受け止めとしては、地域福祉の体系化を模索してきた一連の研究活動への評価となってしまいます。以下、いくつかの理由を述べることにします。

その背景の一つに、地域福祉の体系化を構想した前著『地域福祉推進の理論と方法』(2008)が学術賞の選考の最終候補に残ったものの受賞にいたらず、審査委員の先生から、次の単著への期待が告げられたことにあります。つまり、受賞の書籍は、地域福祉の体系化の延長となる運命を持つということです。もちろん、執筆活動の目的が受賞への再チャレンジでないことは言うまでもないのですが、しかしどこかで意識していたことも事実です。一昨年の学会賞の審査委員を依頼された際に、自書が対象になることが可能であるかを、お尋ねした経緯があります。

大きな理由は、日本地域福祉学会を中心に活動し、学会の副会長や編集委員長を経験するなかで、社会福祉学会における地域福祉研究への評価を高めたいという思いが影響しています。妙な競争心と思われるかもしれませんが、これまでの学会賞には地域福祉研究そのものの受賞がないという事実がありました。正面から地域福祉(マネジメント)概念を問う著書が評価されるのは、同書への評価というよりは、どうしても地域福祉研究への評価、とりわけ体系性への評価として見なしたくな

る心境があるといえます。

最後のものは、地域福祉の研究方法の模索についての独自のこだわりに関するものです。さらに身勝手な受け止めになるのですが、研究活動としてのフィールドワークへの評価というものです。審査結果にも一部触れていただきましたが、当初は、サブタイトルにまで、このフィールドワークを入れて構想するほどアピールしたかったものです。地域福祉研究においては、先行研究もさることながら、先行実践との出会いとそのフィールドの組織化が極めて重要です。その実現には、多くの運が必要で、その運に恵まれての研究活動であったといえます。とくに地域福祉マネジメントでは、地域福祉マネージャーとの出会いが地域福祉の体系化を支えてくれたといっています。

地域福祉には、多様な「履歴」が必要です。その意味で受賞著書に至る履歴として、地域福祉の体系化の多くの模索があったという雑感でした。今回の受賞が、また貴重な研究上の履歴となったことに、感謝申し上げます。

◆ 奨励賞(単著部門) 田中 智子(佛教大学)

受賞作:『知的障害者家族の貧困 —— 家族に依存するケア』

(法律文化社、2020年4月10日刊)



この度は日本社会福祉学会奨励賞を授与していただき、誠にありがとうございます。大変光栄に思うと同時に、身の引き締まる思いです。

今回、受賞の対象となった本は、これまでの障害者やご家族との出会いを通して、障害のある子どもをケアするという偶発的な事象が、どうして一人の女性の生き方を大きく左右するのだろうかという学部時代の素朴な問いが出発点です。また生老病死を通してすべての人に不可避的である、ケアを担うことが、なぜ現代社会において貧困に接近するリスクにつながるのかということの可視化したいという思いもありました。そのような中で、長期にわたりケアを必要とする知的障害者をケアするご家族、特に第一ケアラーである母親たちは、子どもの誕生以降、まさに生涯をかけてケアを最優先とする人生を選ばざるを得ないのです。そのなかで、母親たちは、労働者として、市民として、友人として、妻として、そして女性として生きることを諦め、母親という役割に専念しておられるのだと思います。そのような生活あるいは人生を送る女性たちの声にならない声も含めた思いを、どこまで描ききれたかについては読者の皆様の評価に委ねたいと思いますが、このような形で評価していただけたことは一つの大きな励みとなりました。

本章受賞に際しては、何より日々、過酷とも言える生活を送られておられる障害者のケアラーである皆様、またその家族に寄り添いながら支援をされている専門職の皆様に、心より感謝申し上げます。本書に所収されている家計調査なども現地における実行委員会でご家族、専門職の皆様と問題意識を共有させていただき、また調査自体も関係者の皆様のご尽力があったからこそ実現することがで

きました。また、インタビュー調査も含め、すべて当事者・関係者の皆様との協働的な関係性が不可欠だったと思います。そのような中で、プライバシーや生きづらさをさらけ出して、調査にご協力いただく女性たちの前で、研究者である私の役割とは何なのだろうといつも問われているように思います。これからも当事者に学ぶという姿勢を大事にしながら研究を進めていくことで、少しでも恩返しができると思います。

また、本書のもとになっているのは北海道大学大学院教育研究学院に提出した博士論文です。進まない研究を励まし、方向付けてくださった松本伊智朗先生や元同僚でもあり副査の労を取ってくださった鈴木勉先生をはじめ、多くの諸先輩方、研究仲間にはとても感謝しております。この度は本当にありがとうございました。